

「ひと・つな」だより

ひととの
つながり
を大切に

～三重県に生まれ育つすべての子どもに途切れのない支援を～

三重県における「途切れのない支援システム」の要となる、みえ発達障がい支援システムアドバイザーの研修が始まり、早15年が経過しました。2022年度末には、CLM コーチを含めるとちょうど100名の方がアドバイザーないしはコーチ（アドバイザー91名・コーチ9名）の認定を受けられ、各市町で活躍されています。

全ての子どもが生まれ育つ身近な地域で、適切な支援を受けることができ、各ライフステージで途切れなく橋渡しされていくこと、これが私たちの目標です。地域の皆さまの力なくして、実現はできません。今後とも宜しくお願い申し上げます。

さて、今年度より、国のこども家庭庁が正式に発足しました。国は、児童発達支援センターが障がい児支援の中核的役割を担うことを明確化し、児童発達支援センターが未整備の場合は、関係機関が連携して中核機能を果たす体制を整備することを求めています。

三重県では、国に先んじて2005年度より途切れのない発達支援の仕組み作りを実践してきました。その3本柱は、

- ① 市町において保健・福祉・教育が一か所に集まり専門性を生かした支援が可能なワンストップ窓口や機能の設置
- ② みえ発達障がい支援システムアドバイザー・CLM コーチの育成と市町の窓口や機能への配置
- ③ 「CLM と個別の指導計画」による保育所・幼稚園等での早期支援の導入です。

国の提唱する障がい児支援に特化したものでなく、三重県に住む全ての子どもたちの発達支援、子育て支援を中核に据え、障がいのある子どもやその家族に対しても専門的な支援が可能な仕組みを目指しています。

その後、各市町で途切れのない支援システムの構築、整備が図られてきました。今後は、市町の支援システムに基づいて、必要な子どもたちに身近な地域で支援が届けられるよう、これまで以上に連携の強化が求められています。そこで、当センターでは、8月1日に「地域支援から地域との連携へ」をテーマとし、「ここ・から」研修会を開催しました。

研修会のシンポジウムでは、名張市、いなべ市、志摩市から先進的な取り組みが報告され、改めて各地域の実状や社会資源に応じた発達支援システムやネットワークの構築、アドバイザーやコーチの配置が重要であることが確認されました。三市の取り組みで共通していたのは、限られた地域資源を最大限活用し、有機的に機能させようとする仕組みが一貫性をもって構築され、また、それを維持するため、常に新たな取り組みが実践されてきていたことでした。システムの構築だけでなく、地域における発達支援・子育て支援の質を高く保つには、刻々と変化する実状に即した見直しを常に行うことが重要となります。

子ども心身発達医療センターでは、県行政と市町行政の協力のもと、各市町の実状を確認させて頂き、三重県で育つ子どもや家族に求められる連携について、改めて見直す必要があると考えています。子どもと子どもを取り巻く環境に真の意味で光が当たることを望んでやみません。より適切で必要な支援が身近な地域で子どもたちに届けられるよう、ご協力のほど、宜しくお願い申し上げます。



子ども心身発達医療センター長
中西大介

令和5年度「ここ・から」研修会より（令和5年8月1日 三重県総合文化センター・中ホール）

今年度のセンター研修会は、身近な地域で適切な発達支援が受けられるよう、子どもを取り巻く地域の各機関の役割や、機関同士の連携などネットワークの構築検討について、講演・シンポジウムを行いました。

【講演】 「障がいのある子の育ちを支える地域づくり」～発達障がいを中心に～

豊田市福祉事業団理事長・児童精神科医 高橋脩先生

平成8年、豊田市こども発達センターのセンター長に就任

平成27年以降、現職

高橋先生は、市町村を主体とした地域における発達支援システムの整備と PDCA サイクルによるシステムの発展的運営など仕組みづくりについて長年取り組んでおられ、豊田市で長年実践されています。

豊田市は人口42万人・年間出生児数が3千人規模の中核市で、発達支援の中核施設「豊田市こども発達センター」（心身障がい児総合通園センター）が中心となり、医療機関や乳幼児健診、保育所・幼稚園・小中学校や特別支援学校、相談や療育機関など関連機関が相互補完的に連携しながら発達支援をすすめています。

指摘された地域における発達支援の原則

- ・暮らしの中で最上の支援を（目標は高く。暮らしを犠牲にしない、安心して子育てできる仕組み）
- ・地域の中での、特性・発達・環境などを踏まえた育ちの支援（子どもや家族が主体となるように）
- ・子どもの支援と家族支援は一体（子どもと家族が互いに育ち合う支援）
- ・早期からのライフステージに沿った、総合的・継続性・一貫性のある支援
- ・地域支援の充実には個別支援の専門性とともな地域支援システムが必要

発達支援システムを構築し発展させていくためには各自治体の行政機関が主となり、地域を診断し、適宜見直しを行うことが必要です。人口規模に応じてそれぞれの地域にあったシステムを整備・運営することで、発達に支援が必要な子どもとその家族が安心して地域で生涯を全うすることができるようになります。

【シンポジウム】 「三重県における地域連携システムの現状と課題について」

●<いなべ市> 福祉部長兼福祉事務所 岡 真水 所長

地域資源が少ない中、県の人材育成を利用して地域のリーダー（みえ発達障がい支援システムアドバイザー、以下アドバイザー）の育成に力を入れています。仕組みづくりを始めて15年、発達支援システムはPDCAサイクルで見直し、事業所等との連携、医療支援の活用により地域で子どもを育てる体制づくりを行っています。

●<名張市> 市立桔梗が丘東小学校 松田和隆 校長

教育、福祉、保健、医療が連携する拠点「名張市子どもセンター」に教員アドバイザーを配置しています。教員が園訪問・保護者面談、支援の引継ぎシートを活用して園から学校へスムーズな引継ぎを行っています。市立病院小児科医とは日頃から密に連携し、これらの情報を一元管理しセンター機能を発揮しています。

●<志摩市> こども家庭課 西尾奈菜 課長補佐

療育施設や放課後等デイサービスなど資源が少ないため、学童保育の利用児が多く主任保育士の配置やアドバイザーが巡回しています。園で加配の必要な子は「CLMと個別の指導計画」を利用し支援を行ない資源の少なさをカバーしています。園医とも連絡をとり、必要に応じて園訪問、保護者支援等を行っています。

【講評】

高橋先生からは、3市とも地域の規模に適した充実した発達支援システムが整備されている。アドバイザーも全体をよく俯瞰し、地域のリーダーとしての役割を果たしている。地域のリーダーとなるべき人材を育成することで、その地域で活躍、指導ができる。これは県の人材育成の良いモデルであるご講評いただきました。

【他県からの感想】

- ・三重県の取り組みは、行政の幹部職員と校長先生、医療機関と一緒にシンポジウムができることがすごいです。
- ・お子さんにとって切れ目なく繋がりが持てる環境やお子さんの保護者をも支援しながら地域連携をして見守っていけるシステムが必要であると感じました。
- ・いなべ市や志摩市の体制作りは非常に勉強になりました。本市では発達支援の拠点機能として課を設置したものの、まだ保健、教育、障害、医療がそれぞれ動いているのが実情です。こうして先を進んで努力されている方々を知ることができ、感謝します。

ペアの友だちと、
ボール運びゲームに挑戦！

担任の願い

衝動的に行動するのではなく
相手の友だちのことも考えて
協力できるようになって
ほしい



Aくんもクラスみんなも

成長できるあそびがいいな★

名前： Aくん (4歳児)			
チェック項目 (3) 先生の指示を聞いて行動できない エピソード ボール運びゲームの時、「新聞紙が破れないようにそっと運びましょう」と言っても、急いで引っ張るので新聞紙が破れ、ゲームが続かない		要因 ①ペースを合わせられない	
目標 ボール運びゲームの時、ペアの友だちとペースを合わせて、ボールを運ぶことができる			
期間	具体的な指導方法		結果・評価
O/O (O) ~ O/O (O) O回	<クラス環境の整えとクラス全体の支援> 【ボール運びゲーム】 ・ペアを決めて、2チームに分けておく ・担任と主任で遊び方の見本を示す <遊び方> ①2人でトレイを持ってスタートする ②ボールを4つトレイにのせる ③落とさないように運ぶ(コーンをまわる) ④チームの入れ物に入れる ⑤次の子にトレイを渡す ⑥早く運ぶことができたチームの勝ちです ・「友だちとペースを合わせて、落とさないようにボールを運ぼうね」と伝える ・2チームに分かれてゲームを始める ・ボール運びゲームの勝敗を伝える ・友だちとペースを合わせて、ボールが運べたことをほめる	<個別の支援> ・担任はそばに付いて、ペースが速くなってきたら、「友だちとペースを合わせようね」と声をかける ・個別にほめる	月日 O× 特記事項 幼児期の終わりまでに育ってほしい 10の姿 ア 健康な心と体 ウ 協同性 エ 道徳性・規範意識の芽生え ク 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚 ケ 言葉による伝え合い 評価日：O/O (O) 16:00~

運ぶ物(トレイ、タオル、新聞紙等)や乗せる物(ボール、風船等)を工夫することにより、色々なバリエーションで、気持ちや行動を合わせることができると思います



“早くしたい” 気持ちの強い子に、「ゆっくりね」「ペースを合わせてね」と言葉だけで伝えても、なかなか行動に結びつかないことがあります。また、注意することが多くなってしまいがちです。

このボール運びゲームのように、ゲーム自体に“相手を見ながらペースを調整しないとボールがこぼれてしまう”といったドキドキ・ワクワクする要素を入れ、あそびを通して、気持ちや行動をコントロールする体験を保育の中で積み重ねられるといいですね。

その上、クラス全体で取り組むことにより、気になる子だけでなく、クラスの子もたちの成功体験や認め合いにもつながります。

みえ発達障がい支援システムアドバイザー 人材育成研修について

みえ発達障がい支援システムアドバイザー（AD）研修は、三重県の子どもたちが生まれ育つ市町において、途切れなく支援が受けられることをめざし、発達支援の専門的知識を有する人材を育成する研修です。

研修は、課題解決及び発達支援に有効なツールである「CLMと個別の指導計画」の考え方を基本理念としています。この考え方は、保育所・幼稚園等での気になる行動の解決や保護者支援、ケースワーク等に活用できます。研修方法・内容は、発達支援の問題解決に必要な理論及び手法を理解するための講義や演習、レポート作成等を組み合わせています。主体的な知識や技能の習得に加え、接遇、コミュニケーション力、調整力を習得するための研修も行っています。

「CLM巡回研修」では、研修者派遣市町の園などへ直接出向いて、保育観察や作成検討会を行っています。



今年度の目玉の研修である「親支援研修」では、親が子育てに困った時、すぐに相談できる場所（市町の子育て支援室、発達支援室など）で、CLMの課題解決方法（主訴の要因分析）を用いて、すぐに役立つ育児・発達支援ができるようなADを目指し、相談支援のトレーニングを積んでいます。今年度の研修者は、保育士4名ですが、今までの経験を活かし、『検査のみで見立てず、保育で見立てる目利き力』をつけるために、親支援研修を積み重ねています。



お知らせ

「CLMと個別の指導計画」実践報告会

令和5年12月10日（日）

男女共同参画センター「フレンテみえ」多目的ホール

対象：保育士・教員・保健師等子ども支援に携わっている方、関係行政職員等

【実践報告】

- ① 「異年齢保育で育ち合う」
～リーダーシップが取れるようになったAさん～
(5歳児)
- ② 「通常学級の授業で生き生きと！」
～意欲的に取り組めるようになり、
自信がついた小1Aさん～ (小1)
- ③ 「個別のかかわりからクラスへ」
～園全体で子どもたちと担任を支える～ (5歳児)

小学校の実践が報告されます！

「そうか、こうすればいいのか」と、
通常学級ですることが学べますよ！
通常学級の先生、ぜひどうぞ！



異年齢保育で悩んでいる先生・子どもとの関係作りに
悩んでいる先生、保育のヒントがもらえますよ！

令和5年(2023年) 10月 3日

<発行> 三重県立子ども心身発達医療センター 発達総合支援部 医療連携課

〒514-0125 三重県津市大里窪田町 340 番 5

電話番号 059-253-2000(代) FAX 059-253-2029

MAIL: hattatsuc@pref.mie.lg.jp URL: <http://www.pref.mie.lg.jp/CHILDC/>

